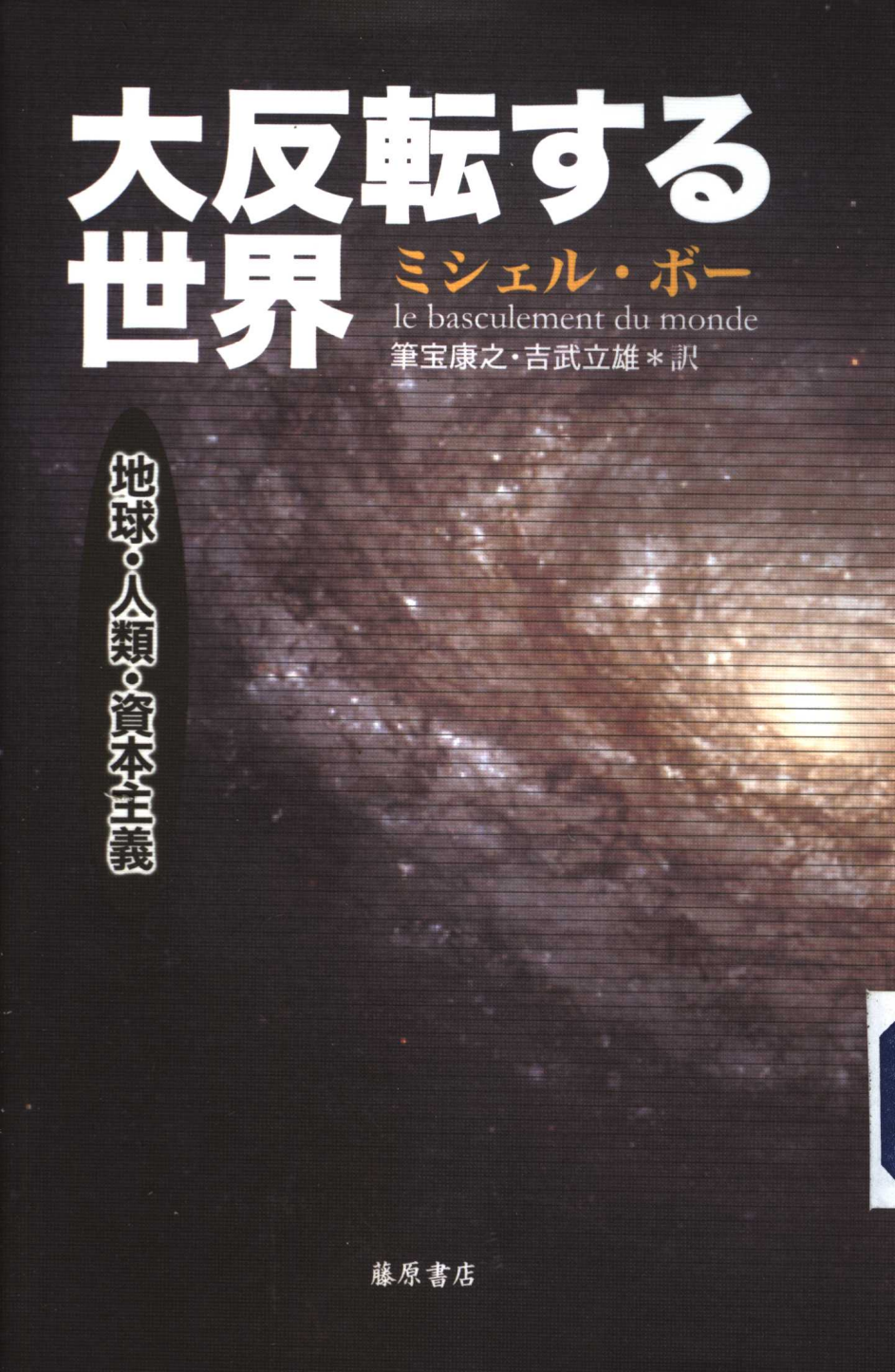
大反転する世界

ミシェル・ボー

le basculement du monde

筆宝康之・吉武立雄＊訳

地球・人類・資本主義



藤原書店

000
F-81
142

大反転する世界

地球・人類・資本主義

ミシェル・ボー
筆宝康之・吉武立雄 訳

国際共同研究室
CICR
寄贈図書

藤原書店

2002年9月25日
NB

著者紹介

Michel BEAUD（ミシェル・ボー）

1935年生まれ。パリ政治学院で法学と政治学、経済学をおさめる。モロッコ銀行勤務、CNRS（国立科学研究所）を経て、パリ第8、第7大学教授を歴任。現在パリ大学名誉教授。ミッテラン政権の第九次経済計画に参加、「世界経済・第三世界・発展に関する科学的研究者集団」（GENDEV）代表、仏環境庁「地球環境の危機と風土変化に関する委員会」副委員長のほか、世界経済・地球環境・労働関係の多彩な社会活動を展開。A・リピエッツの盟友、訪日数回。著書に『資本主義の世界史』（藤原書店）ほか。

訳者紹介

筆宝康之（ひっぽう・やすゆき）

1937年生まれ。東京大学経済学部卒業。北海道大学大学院経済学研究科博士課程修了（経済学博士）。北星学園大学助教授、パリ第1大学客員教授などをへて現在、立正大学経済学部教授。労働経済学、社会経済思想、日仏社会労働史。近年はアジアの経済発展と水資源・環境緑化を研究。第6回大内兵衛賞受賞。主著に『日本建設労働論』（御茶の水書房）、共著に『現代技術と労働の思想』（井野博満他、有斐閣）、共訳書に、M・ボー『資本主義の世界史』（藤原書店）がある。日仏経済学会会員。

吉武立雄（よしたけ・たつお）

1932年生まれ。東京大学社会科学研究科博士課程中退。光洋精工に入社。海外軸受メーカーとの技術提携などに従事。現在、文筆活動。訳書にクーロン『簡単な諸機械の理論』（工業調査会）、エッシュマンほか『ころがり軸受ハンドブック』（工業調査会）、編訳書に『トライボロジーの世紀』（工業調査会）ほかがある。

大反転する世界——地球・人類・資本主義

2002年4月30日　初版第1刷発行©
2002年6月30日　初版第2刷発行

訳　者　筆宝康之
　　吉武立雄

発行者　藤原良雄

発行所　株式会社 藤原書店

〒162-0041　東京都新宿区早稲田鶴巻町523

TEL　03（5272）0301
FAX　03（5272）0450
振替　00160-4-17013

印刷・製本　図書印刷

落丁本・乱丁本はお取り替えします
定価はカバーに表示してあります

Printed in Japan
ISBN4-89434-280-4

日本の読者へ

二〇〇一年九月十一日。ニューヨークの世界貿易センタービルの上層三分の一周辺で、大混乱が起きた。……一機の旅客機が重たげな線を描いて接近し、そのまま第二タワーに激突した。オレンジ色の爆煙が噴出する。火事だ、パニックの叫喚と恐怖、狼狽と動揺。かずかずの人影が高いビルの上から壁にそって墜落してくる。やがてひとつの塔が崩壊し、ほどなく第二タワーももろくも崩れ落ちた。

これはビデオのドラマではない。破局劇の映画でもない。三〇〇〇名以上の死者が出たが、その遺体はテレビに放映されなかった。崩壊時の粉塵、ガレキの山、辺りに立ちこめる煙、灰燼の山、おびただしい死者の遺族の群れ。途方もなく異常な自爆死テロ襲撃……。想像もできない。どんな書物や映画の作者もあえてそれを思いつかなかったテロ攻撃。建築家も、航空事故の専門家も、保険会社と再保険会社も、そのリスクを無視し、回避してきたテロ行為。オサマ・ビン・ラーディンに扇動され「アメリカ合衆国に対抗する世界戦争」が次々に生じた。そしてその結果、ブッシュ大統領は国際テロ

リズムへの「総力戦」を宣言する方向にむかった。

二十一世紀の初頭になぜ暴力・テロが集中してきたのだろう。

友人や読者から私に電話がくる。「では、これが世界の大反転（le Basculement du monde）というわけですか？」と。筆者はこれに答えようとする。「ある意味ではそうです。でも、それはひとつの衝撃、ショックにすぎない。しかもある特定領域にだけ与えられた衝撃で、地震のときは進行して波及する衝撃ははるかに広大なものです。九月十一日のテロの場合、問題の実態をうかがわせるひとつの兆候だという論点は残りますが。それは、ある局面、さまざまな力、そのダイナミクス、私たちの時代の緊張点又は緊張線に光を投げかけました」と。

そこでまず、暴力・テロから述べよう。平和の時代なのに、ここには想像もつかない大問題がある。

とはいえ、暴力は私たちの時代のいたる所にあるのではないか。テロ行為、地域武力紛争、海賊行為、組織暴力、マフィアやヤクザの誘拐、日常の犯罪非行と暴力テロはいたるところに浸透し、家庭内暴力から校内暴力……にまでいきつく。ゆたかな強国の暴力は、世界の悲惨を拡大させる。貧しい地域を超過搾取する企業暴力としては、株式相場対策のために事業活動を停止して解雇する例がある。国家暴力なら、イラクやトルコのクルド民族攻撃、英米両国のイラン空爆、中国の人民解放軍によるチベット武力弾圧。パレスチナでのイスラエル人テロ。チェチェンでのロシア軍の武力介入、アフリカ各地の戦争行為と、その他さまざまある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そのように語ることによって、筆者はテロリズムを陳腐化しているのか。無論そうではない。九月十一日のテロ行為は最悪の犯罪行為のひとつである。それは紛争の埒外にあり、住民に敵対する。直接的にせよ、間接的にせよ、それを引き起こした本人たちは、裁判にかけられるべきだ。と同時に、このテロ行為は巨大な氷山の一角である。なぜなら、過去においてまた今日でも、テロリズムは、国家や幾多の外国勢力の占領支配に抗して行使されたし、反植民地主義者や、パレスチナにユダヤが入植を果たしたときのシオニストやアルジェリアのように、民族解放運動によってもなされた。ほとんど常に、テロリズムはひとつの大義名分によって正当化される。そして人民の支持なしにはそれは持続できない。

ところが多分、事件そのものより重要なことは、九月十一日の事件が、責任当局をはじめ、良識ある人々や宗教関係者によってほぼ満場一致で見捨てられたのに、恩恵から除外され、見捨てられた地域、国、地帯のひとびとのなかに、その反響を見いだしたことである。しかし、最もよく目に見えることは、パレスチナ地区とパキスタンにおいて明示された。アラブ－イスラム世界の指導者の心配と慎重な態度は、今回のテロ行為に関して、共感ないし同意はもとより排除された現地難民、窮民の内部における理解の拡大を示している。

そしてまさにそこに、現代世界の諸断層がまざまざと再確認されるのである。貧困と富裕のはざま、支配され、ときには恥辱を受けた国々と帝国主義的な列強の間がそれである。またアジア世界と欧米世界、イスラム教圏とキリスト教圏の間にも断層がある。ブッシュ大統領は、テロ行為へのたたかい

を呼び起こすために、一度だけ「十字軍」という言葉を発し、この語はアラブ世界の全体にたちまち広がった。九月十一日のテロ行為は、突如として、世界によって今日もたらされた危機状態を、特定地域で一瞬にして象徴的に暴露した。その危機とは、経済的、金融的、技術的、軍事的な不平等であり、グローバル化の渦にまきこまれた人々の、とりわけ若い世代の悪化した状態、という断層の事実。思想的な、政治的な、歴史の傷口と屈辱につねに敏感に反応する感受性の諸断層がそれである。今回の多発テロはまた、今日の北の豊かな国（と都市高層建築文明）がはらむ極度のもろさにも光をあてた。

きわめて不公正で、高いリスクをはらみ、数知れぬ爆発の可能性をかかえたまま、傷つきやすくてもろい強大国によって支配されているこの現代世界。そこに、二〇〇一年九月十一日のテロ行為があきらかにしたものがある。そうした複数の局面からなりたつ、私たちの社会と世界の大激変のプロセスの症候群、それを筆者は「大反転する世界（Basculement du monde）」と呼ぶ。

とはいえ、このプロセスにはなおきわめて多くの内容がある。この数十年間を考察してみよう。人類が、これほどまで強力な成長を経験した時代は決してない。人口と欲求の急成長、生産と消費と汚染……の異常成長、人類社会は、これほどにエネルギーと物質と生き物を支配する能力、モノを生産、破壊して移動させ、情報を処理して流通させるといった能力を、かつて決してもったことはない。人間活動の発達が、生命系環境の大量破壊をともない、地球の基本的諸要素（オゾン層、海洋、風土生態系など）を傷つけ、人類生活の不可欠資源（水、森林、魚など）まで搾取する時代は、人類にとってはじ

めてのことなのだ。貧困についても同じことがいえる。もっとよりよく生きたい、という願いについても同じことだ。そしてまた、地球と人類に有害でない（クリーン）エネルギーと（低エントロピー）技術の差し迫った必要についても同じである。

このように、地球の未来、各人の、各家族の、各国の、未来世代の、人類とユマニスムの未来のすべてが問題になる時代なのである。

さらに、あれやこれやの現代の変化が、極度の速度で加速的に進展している点にも注意しよう。本書の初版が刊行されてからだけみても、携帯電話の使用は急テンポで世界中に普及し、その機能も多様化してきた。高速インターネットもその旧型を押しのけて、すでに新しいコンセプトの（さらに急速で、強力で、多分より実用的な）ウェブが準備されている。現在の異なるサポートシステム（電話、テレビ、コンピュータ）から、ユニークで多様なコミュニケーションと情報とマルチメディアの世界が構築されつつある。データ通信は、私たちの生活のすべての時間に入り込んでいる。ヒトゲノムの解読は、病気の予測、診断やその処方や医療に、あらたな可能性の道を拓いている。医学的にサポートされた人工受精出産と結合し、遺伝子工学は、そこから特別な性質を持った子どもの選択出産を一層可能にしている。動物のクローン化が準備され、人間のクローン化の可能性が予告される。多機能で再生力あるＥＳまたは万能細胞（cellules souches）の使用はすべての新しい治療法に道を拓くだろう。

そして、以上のどれもが、商品と利潤からなる「カネが帝王」の旗印の下でなされる。コミュニケーションとマルチメディアでの新世界の活用は、情報とインターネットと画像通信をめぐって、大企業間の巨人の闘いをつくりだす。遺伝子操作された種子と農産物の販売は、ハイテク信奉派と慎重派の大論争点となっており、大国間、南北間の争点でもある。ソルトレイクシティのある会社は、許可免許証書を組織的にかき集めて、乳癌の診断と遺伝子処理の世界的な独占特権を確保しようとつとめている。家畜のクローン化をめぐってひとつの新市場が開かれつつある。人間のクローン化の全世界的禁止に関して、論争がかわされているが、それは厳禁論なのか、それとも単なる当面の猶予論なのか。単なる再生産複製用のクローン化のためか、治療用のクローン化でもあるのか。それともまだフロンティア領域にすぎないのか。とはいえ、すでに高額医療費を要する個人診療所では、かれらの医療費請求書にこの項目を記入している……。

これらのあらたな論争点に直面して、だが同時に人類の三分の一を悩ます極めて大きな貧困に直面して、また拡大する断層に、世界各地の不正取引やマフィア活動の発展に、(とくにアフリカに集中する)エイズの被害に、つぎの数十年の携帯飲料水の深刻な不足に、そしてさらに大規模に地球環境ですすむ生態系の不均衡化に対して、解決対策の意志決定と国際的、全地球的な介入の戦略とその方策手続きがますます必要になる。

たしかに、数多くの国際機関が多様な領域において無数の行動を誘導している。だが、それらの可

能性と行動手段は不充分で、必要不可欠な分野にとどまり、大国の政府援助に依存しているのが現状だ。ところで、合衆国は、地球の大問題を心配するどころか、その世界最大強国の地位を利用して、自国固有の国益の確保にうつつをぬかしている。それに対して、欧州の方は、自己組織化に専念する各国が、総結集する「欧州演奏会」で、自国が演じるパートの重みをつけるのに腐心している。しかし、二十一世紀を特徴づけるのは、何といってもアジアの確立であろう。多くは一〇億人前後の巨大な人口をもつ中国とインドの両大国の関係に依存し、また経済と技術の面で評価すべき力をもつ日本および、韓国および東南アジアの諸国の動向に依存している。

アジアというより、その主要な構成国は、将来世代を考慮し、地球と世界の最低所得者、無産者が集中するその人口との均衡を考慮する自己の道を見出し、その解決に貢献するすべを知るのではないか。というのも、過去二世紀にわたり欧米社会が責任主体不在のまま活用してきた資本主義的発展方式は、支持しがたいからである。あまりにもひどい浪費（とくにエネルギー）、あまりにひどい汚染（産業廃棄物、化学肥料と農薬づけの農業と都市化による）、あまりにむごい生き物の損傷、不充分な連帯などが社会の凝集力を損なっている。しかも、グローバル化と新自由主義の結合は、これまでの社会経験を脆くし、必要な前進にブレーキをかけている。この結合は、アングロ－サクソンの諸大国と二十世紀の最後の数十年における大銀行や国際金融の組織により、推進される。私たちが必要とするもの、本書の二〇〇〇年版の「あとがき」で、「わが願望」と呼んだもの。それは人間的な世界のための、多次元で多地域におけるまったく単純な戦略である。読者諸賢に、「それを理解し、実行に移してみよ

う、私たちが直面している大問題、その争点を正しく把握しよう」、とよびかけたい。

最後になるが、『資本主義の世界史』のあとをうけて、今回『大反転する世界』が邦訳され、日本で刊行されるのは、筆者にとって大きな誇りである。筆者はここで、邦訳者の筆宝康之教授と吉武立雄氏に感謝し、藤原書店の藤原良雄社長の深いご配慮と編集担当の清藤洋氏のご協力にも、心からお礼の気持ちを申しのべたい。

二〇〇二年三月十七日

ミシェル・ボー

［訳者付記］　本序文で省略された「日本の若い世代へのことば」と本書の背景と要点については、本書と同時に発行される藤原書店の『環』（二〇〇二年四月・第九号）誌上の筆宝による昨年訪日時のインタビューも、あわせて参照されたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大反転する世界／目次

日本の読者へ　i
謝　辞　9
はじめに　13

第一章　ひとつの世界が終わる予兆　17

一　いったい何が終わるのか　18
二　地政学的な新しい均衡のスケッチ　20
　かつての世界地図は……／欧州中心史観の破綻／新しい地図はどう描かれるか
三　人類が引き起こした錯綜する大災禍　32
　より豊かな世界でより貧しくなる／テロ行為の連鎖反応／幾多の戦争と平和／無視される地球と生命系／水土大気の汚染と破壊は進行する
四　最後の審判――怒りの日　45
五　盲目のままに　47

第二章　世界の「大反転」を考えるためのまわり道　49

一　今日の世界を考察する前提と諸困難　50
　すべてが再審に付されるとき／両極に分裂した世界／知識と意志

二　複雑系について考える　55
極端な行き過ぎ／大いなる望み／謙虚さ
三　世界と複雑系　60
星がきらめく天空と内なる道徳律（カント）／いかなる世界システムか／自律的再生産とは
四　三つの再生産——地球・人類・資本主義　67
地球の再生産／人類の再生産／資本主義の拡大再生産
五　大反転する世界と三大再生産　73
仮説／命題
六　猛威をふるう諸力がもたらすもの　76

第三章　緩慢な変化から目もくらむ加速の時代へ　81

一　加速して暴走する時代　82
二　二つの再生産の時代（1）——はるかな人類前史と原始の人類　84
自然と超自然のはざまで／物的に恵まれた諸時代／自然と共に生きる道／言語系と文化系
三　二つの再生産の時代（2）——原初の人類社会と最初の巨大文明　90
権力の出現／貢納と生存資源／分業と交換／基本的必要と不可欠でない欲望
四　三つの再生産の時代（3）——構造化された新しいダイナミズム　100
資本主義と各国／世界系資本主義／資本主義の強靭な自己再生産能力

五　加速のメカニズム　118
地球規模の台風さながらに／資本主義と加速化／資本主義と科学・技術／資本主義と国家／加速する現代史

第四章　経済がすべて／貨幣の盲目崇拝　135

一　経済にますます従属を深める社会　136
三つの宿命／新しい「経済の運命」／「市場」という名の虚偽イデオロギー／「資本主義」という用語は禁句か

二　グローバル化の大渦に巻きこまれる国家、企業、社会　150
各国系資本主義の諸様相／グローバル化／各国系資本主義の統合・世界化／金融分野の自律性／超巨大企業の重み／強国のリベラリズム／拡大する格差と不平等

三　貨幣と商品の全面的支配　172
「貨幣が帝王」の拝金主義／コスト対利益の量計算による一元化／商品と市場が全面化して支配する時代／新しい全体主義か

四　地球規模での新しいタイプの対立とあつれき　189
「定常状態」という夢／憂慮すべきダイナミクス／各再生産をめぐる対立とあつれき

第五章　三つの再生産系の間の抗争　197

一　現代社会の断層と危機　198

さまざまな断層の拡大／貧しい国における貧困と排除／豊かな諸国における貧困の諸相／富と貧困はメダルの表裏か

二　不平等資本主義の無限成長マシン　212

極端な不平等を明示する若干のデータ／かみ合う悪循環メカニズムの歯車／それは終わりなきコースか

三　地球のトリプル再生産は危機に瀕している　223

地球と人類社会の現在／環境対策のための新市場の誕生／地球環境危機の自覚過程／オゾン層の危機／気候に異変が起きている／南北問題の争点はどこに

第六章　主要な争点をめぐって　241

一　資本主義と科学・技術の新たな同盟　244

新たな地殻変動の開始／テクノ資本主義をめぐって／資本主義には何の制約もないのか

二　増殖し続ける欲望の体系　252

豊富のなかの貧困／欲求の本質と諸源泉／諸欲求（必要と欲望）の類型学／人間欲求の膨張

三　労働の廃絶という目標達成の夢　267

ユートピアから現実へ——労働時間の短縮とワークシェアリング／労働の痛苦と必要性——人間労働と資本主義／労働の終焉——これこそが問題の核心をなす

四　限りなく無責任な時代　283

差し迫っている破局の脅威／無責任の病理／無責任とアクラシー（統治能力喪失・意思決定と行動の放棄）／民主主義とアクラシー／広島の歩道に印された被爆者の影

第七章　まとめ——省察と行動のために　303

一　いま何よりも留意すべきこと　305

二　黒いシナリオのあらすじ　308

容易ならざる事態／大反転する時代の気流／未来を素描すれば

三　不確実性について　322

四　希望の原理を求めて　324

何をなすべきか／どの価値原則をとるか／責任の原則／地球規模の予防・制裁原則

五　明日への希望のシナリオ　331

六　新しい「枢軸の時代」の必要性　333

ヤスパースと「枢軸の時代」／新しい「枢軸の時代」は到来するか

七　強大な変化の波に直面して　337

海中に投げこまれたビンのように／地球規模の妥協は可能か／出口のドアは壁のなかに

エピローグ　349

二〇〇〇年版へのあとがき　352

原注　396

参考文献一覧　409

訳者あとがき　410

索引　426

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com